

或る日、沢田薫さんから、沢田政由が少年の頃に演じた金多、豆蔵の人形芝居を綴って見ないかと言われたので、聞きとりした事も交えて、私なりに綴って見る。

昭和六く七年だった。鍛冶町、山中豊一宅で「金多、豆蔵の人形芝居」の、ビラが電柱のあちら、こちらに貼られていた。

晴れ上がった夏空の下に太陽の光が「ピラ」の色彩を映し、村人達の目を引き止める。金多、豆蔵が有るのだと村人達は語り合いながら、此れは早く夕飯を済ませて見に行こうと話し合っていた。

一日の仕事から解放され、疲れきった村人は電灯が灯る頃になると早速、夕飯を終えて会場へと急ぐ。婆様達は孫を連れ婦女子は三く五人と群れをなし、暗い夜道を話し合いながら集って来た。会場は次第に賑わいの声

が増し開幕を待つ雰囲気は濃くなり、客席は人で一杯になり、開演を催促する声があがり「早く金多、豆蔵、始めるよ」と声が飛び交い、その内に空缶の太鼓や鉦の音が「ドン、ドン、ドコドン」と軽やかな音を響かせると、場内は、ざわめきの声が静まり、見物人を人形芝居の世界へ誘い込んで行った。

かん高い拍子木の音が鳴り、幕の割目から金多と豆蔵が顔を出し、客席を「キョロ、キョロ」と見ると観客から「アハハアア……」と笑い声

演じて、人形芝居を見るに行った。沢田政由さんは、その人形芝居の影響を、諸に受け、人形芝居は私にも出来ると思い、好奇心にかられて早速、付近にある桐の木の枝を採ってきて、桐には芯が無く空洞になって居るのを知っていたので、長さ約二寸、直径約一寸五分位に切り頭部の形にし、桐の木の空洞に指を入れ自在に動くのを知り、人形の顔の部分の皮を剥ぎ取り、色々な顔を書き入れ、頭部には、馬の尾や、女の髪を貰うけ人形の頭に取り付けた。残るのは、人形の着物だけである。人形の着物は義姉（沢田薫さんの母）に頼んで拾数枚、縫って貰った。

こうして、友達と共に沢田政由一座が出来上ったのである。沢田政由さんは、館岡の人形芝居を見てからは、今日の此の日を夢見て、密かに仲間達と練習を積み、沢田政由さんなりに自信は満々であったが、又、わずかの不安もあった。此の日は沢田政由さんが、得意とする「岩見重太郎のヒヒ退治」を初舞台に無我無中で演じて緊張したのか、顔や身体が、汗でびっしょりになった。

初めての舞台で自分（政由）が演じた人形芝居は全く覚えて居なかったが、客席からは拍手が、夢の様に聞こえていて、自分には上出来であった。乾いた唇を舌で湿すと、塩の味がしたが、子供達や大人も人形芝居に夢中にさせたのは大成功であった。

芝居の魅力は何んと言っても、入場料が無料であったことで、それでも客席からは沢山の花代（ローソク）が投げられたのは本当に有難く喜ばしかった。舞台はローソクの明りを利用していった。

当時、嘉瀬には劇場が有り、映画や演劇、民謡大会などが連日の様にあったが、村は冷害や水害、病虫害などの被害で生活に疲れ、映画や演

## 嘉瀬の金多・豆蔵

＝ 沢田政由一座 ＝



### 秋 元 惣 之 進

が湧く。拍子木の響きが終ると幕が開き、金多と豆蔵が「東西、トーザイ……只今より金多、豆蔵の、人形芝居の始り……始り……皆様、今晚は。私、金多と豆蔵です。」嘉瀬で一番良え、色男でしょう。嘉瀬で私を婿に貰う家は無えがな……」「ドンドン、パンパ、ドンパンパ……」観客は「どっと」笑い声が止まらない。

金多と豆蔵の演技を操りながら語っているのは、鍛冶町の沢田政由さん（小さい頃のアダ名は、チョンマと言った）である。

又、舞台の隅に座って金多、豆蔵の演技に合わせて空缶の太鼓の伴奏を敲くのは、鳴海惣五郎さんで（当時上古町Ⅱ輪西に移住）、もう一人は会場を提供して居る山中豊一さん（故人）である。沢田政由さんが操る金多と豆蔵の衣装替や、出番の終わった人形の片付け役は、山中豊一さんと野呂梅太郎さん（故人）の二人で、沢田政由さんの身体の周囲を、こまねずみの様に「くるくる」回りながら片付けている姿は多忙である。

沢田政由さんは独演の金多、豆蔵のお喋りを終えると人形を置き「人形芝居一座」を紹介した。

「生れて初めて金多、豆蔵を演じさせて載き、この後も精一杯、演じさせて貰いますから宜敷くお願いします」と、挨拶をして愛嬌の良い童顔で「ペコリ」と頭を下げると客席から拍手が湧いた。

当時の沢田政由さん一座のメンバーは、いずれもまだ小学校六年生の拾三歳の少年であった。去年の冬、嘉瀬劇場に「館岡の人形芝居」が来

劇は見たくとも入場料が払えない程に貧困であったので敬遠され、娯楽に乏しかった。そんな中で素人で無料の人形芝居の空気は、びったり合い、何よりも楽しみにしていた。又、人形芝居の動作は生きている様に動き、声色と巧みな操りとに依って喜びや悲しみは観客と一体となって演じ、又、小さな舞台を照らす照明の光を受ける人形は其の姿体や顔に陰影が出来てそれが却って怖い人形芝居は凄味を増し、見る人々を「ぞくぞく」させ、更に人形が交す会話の面白さは笑いを誘い、闇の中に閃めく刃や上空に飛ぶ妖怪の首はお客を魅了する。

一回目の人形芝居は成功し、二回目の公演は上古町の鳴海惣五郎宅で開演する予定になった。沢田政由一座は学校の勉強も放任しがちで、人形芝居に夢中になり日夜、演技と台詞を覚えるのに努力し、片時も脳裏から離れない。その甲斐あって、沢田政由さんは「好きこそ、物の上手なれ」と言うが演技と台詞はすぐ覚えていった。

そして、沢田政由さんは、子煩悩の父に「ピラ」を書いて貰い「ピラ」貼りにも奔走した。愈々二回目の人形芝居が、八幡宮の宵宮の晩に、鳴海惣五郎宅で催された。宵宮参りの大半の人々が人形芝居を見に行ったと言う。此の時も人形芝居劇は無料公演だったが、客席からは沢山の花代（ローソク）が投げられた。

沢田政由一座の人形芝居は本職顔負けだ、と村中の話題と風評が飛んだ。此れを聞いた嘉瀬劇場主（木下興行）は沢田政由さんに「是非共、お盆に当劇場で人形芝居を」と申込み。思案に迷った沢田政由さんは、本職で無いから、と断ったが劇場主は平身低頭をお願いするので、断り切れず遂に承諾した。

嘉瀬には、明誓庵と明光庵の二つの庵寺が並んでいるが、村が大きい

ので、お盆には墓参りの人々が深夜迄続き、奉納獅子舞や、前町の盆踊りが大きな輪となり、老苦男女が朝迄踊って大賑わいとなる。お寺の隣りに劇場があったので、劇場前も人通りで混雑した。又、劇場前には「八月拾五日、嘉瀬劇場、人形芝居、沢田政由一座公演」と大きなビラが貼られてあるので、流石の沢田政由少年も胸が「ドキ、ドキ」高鳴った。墓参りの人々はビラに目をむけて拾五日の晩は人形芝居を観に行こうと語り合っていた。

沢田政由一座は、明日に控えた公演を前に忙しかった。愈々、お盆の拾五日が来て、夕日が西に沈む頃になると、村人達が大勢、劇場に集って来た。会場は忽ち大入満員となった。「ざわめき」の音と笑い声が溢れ、開演を催促する声が起り、村人達はお盆の楽しみにと待っていたのだ。舞台裏の沢田政由さんには、会場の熱気が伝わり、今迄の人形芝居を演じた時よりも気持の高振りを覚える。今迄は無料公演であったが、今日の舞台には少ないが木戸銭（入場料）を払って貰うため、全責任が掛っている。少年の沢田政由さんは流石に溜息を吐いた。

愈々開演、廃缶の太鼓や鉦を鳴らす金属の音。「バタン、バタン」と拍子木を打つ音。沢田政由さんは右手に金多、左手に豆蔵を差し込み、幕の間から金多、豆蔵の顔を見せたら、子供達は歓声を上げた。

最初は縁起の良い三番叟（猿楽で翁の舞）の出し物から。

最初は「し——ん」と静まりかえっていたが場内から拍手喝采が屋根も割れんばかりに鳴り響きました。続いて幕間から顔を出したのが金多と豆蔵……

「東西、ト——ザイ」金多と豆蔵です。

「皆様、今晚は。つたないながらも沢田政由一座の人形芝居、精一杯や

……」、客席の人々は大笑いをした。

「今日は大入満員で本当に有難とう御座いました。」では、アバヨ……人形芝居が終ると観客は今度、何時やるんだ……と叫んで、今日の人形芝居は本当に良かったな……本職、顔負けだと喜んで帰って行った。

好評だった人形芝居は村のあち、こちで囁やかれ、学校に聞えぬはずは無い。数日後、沢田政由さん等は学校に呼び出された。職員室に恐る恐る入って行くと、いきなり校長と担任の先生は「沢田——」と怒鳴りつけ、お前達は生徒の分際で劇場で木戸銭（入場料）を取り人形芝居をやるとは何事だ。と怒り、三〇分程も説教を語られ、晩迄職員室に立って反省しろ、と惨々に怒鳴られた。沢田政由さん達は目に涙を浮かべ、過ぎし日の人形芝居の事を思い浮かべていると、先生達は下校の時間が来て帰宅してしまった。

職員室や校内は急に静まり、窓を見ると、夕日が沈み薄暗くなっていた。其の時である。沢田政由さんは「ようし」逃げて家へ帰ろう……と言ったので、一同は「う——ん」と返事を返して教室にある「かばん」も忘れ、一目散に家に逃げ帰った。其れから学校を二三日間休んで、又、登校したが先生は沢田政由さん等を見ても何んにも言わなかった。

幼少ながらも、沢田政由さんは農民の苦勞を目の当りに見て、過重労働と貧困の疲れを、わずかなりともいやさんと、嘉瀬の人々に人形芝居で文化的な娯楽を、と夢見ていたが、校長と担任の先生に惨々に叱られた恐怖心が身に染み遂に人形芝居を断念した。

この噂を聞いた村人達や子供等は、沢田政由さんの金多、豆蔵は、もう、二度と復活しないだろう、と惜しげに語り合っていた。

らせて載きます。」

「今の世の中、世は逆さまで、嘉瀬と金木の間の川コ、石コ流れて木の葉コ沈む」

「嘉瀬さ来る嫁、婿、皆な利口だ。嘉瀬は外観ばれ良くて、中味コ空だ。」

ドンドンパンパン、ドン、パンパン

「父ちゃと、隣の母ちゃと、話こしてら、その隣りの後家嬢、それ見て焼餅焼いで、二人は仲良いと喋べって、歩いてら……」

ドンドンパンパン、ドン、パンパン

客席からは一斉に爆笑と拍手が湧いた。

最初は胸が震えたが、初めの口上を述べると次第に不安が消えて行く……沢田政由さんの出し物の中で最も得意とする「岩見重太郎の狒狒退治」「安寿と厨子王」「人買い周旋屋」、父上の仇を討たんが為に武士の息子は「鬼神のお松」や山賊との対決……お松の仲間の山賊を次々に斬り、遂にお松を追いつめ、白刃が閃めき、お松が斬られる。その間、鬼神のお松は娘から老婆に、鬼女へと変身、早変り、刀の交す音。お松の首が飛ぶ……劇場で演じた人形芝居は本職顔負けの迫力があり、沢田政由さんは一人で身体が動き、人形達は舞台上の上を激しく動き廻った。客席からは大きな拍手が次々に送られ、人形劇は終わった。

幕が閉じると幕の切目から金多と豆蔵が顔を出し、今晚はこれで終りだが「風邪引くな……強い風コ吹くと屋根コ飛んだり、稲コ倒伏、良いこと無い、身体だけは気を付けて、爺様も婆様も百歳迄、長生きしてけろ……金多と豆蔵は皆様の健康を心から祈っているからなあ……」「金多と豆蔵、喋る年ア……必ず作。良いから安心して働いて下さいなあ……」

其の後、沢田政由さんは高等小学校二年生を卒業して、七男坊の為に県外に就職し、定年退職後、帰郷し妻子と共に東町に定住し、現在六七歳の余生を楽しんでおられるが、金多、豆蔵のことはあまり語りたがらない。

（注）顔写真は、沢田政由氏二十五歳の頃。

### 津軽金多・豆蔵の由来

由来 昔我が国では（嘉保年間一一一一年頃）備、傀子といわれた人形廻しがあり（古文獻）による）それが室町時代に入り各地に散在し、いろいろかたちをかえて行われるようになった。津軽地方でも、明治以前からアメ売り行人人は路上で人形を動かして、子供達に見せていたといわれ、こうしたことからヒントを得てできたのが津軽の伝統人形芝居である。

創始及び沿革 明治四十年頃西郡木造町亀ヶ岡の人野呂粕次郎氏

（後英昭と改名）によって創作され、

初め館岡人形芝居として発足いたしましたが大正の初期に名称を金多・豆蔵人形劇と改めたものである。その頃津軽にも数組の人形劇座があったが、なかでも金多・豆蔵の名はあまりにも有名であった。



# 嘉瀬奴踊り歌詞「タタラビ花コ」

《特集1》



ウマノアシガタ

「課題」

嘉瀬奴踊り歌詞に『裏のカゲジの タタラビ花コ 昼にしおれて 夜に咲く』と唄われています。歌詞の意味するものと、『タタラビ花』とは、どんな花だろうか。嘉瀬の古老からの聞き伝えでも御調査のうえ、あなたなりの、自由な発想のもとに、歌詞の解釈、どんな花なのか回答して下さい。

## 馬の脚形

沢田 薫

聞く所によれば「タタラビ」と云えば、青森営林局で出版した本の中に、学名「うまのあしがた」をさす俗名だと書いてあると聞きました。国民百科辞典で、うまのあしがたを調べたら、次のように解説しています。

◎陶房出づ毒の黄色にきんぼうけ 草村素子

『タタラビ花』の作者は分らない。意味も分らないが、毒の花であるので夜に咲く、とうがった解釈では、どうだろうか？

山中久美先生は、他の現役の先生から聞かれても分らなかったのですが、嘉瀬老人クラブまで行き、老人に聞きたたしたところ、白川征五郎さんが知っていて、「タタラビ花」と「馬の脚形」と同一花だと教えてくれたそうです。

## 私は知らないタタラビ花コ

沢田 政 孝

『タタラビ花コ』嘉瀬の古老に聞き回ったが、ハッキリしたものの答えは返ってこなかった。また、藩政時代から歌われてきた奴踊りの歌詞の意味及び原因も、遠い昔からの伝承あたりへの意義も薄れてきた現在明解な回答を得ることは、今の嘉瀬からは探ることがむずかしくなった。奴踊りに起因する歌詞そのものは、封建時代の時代背景と、農村生活および藩政施策の諸資料から推考するに、『十三の砂山』『鱒ヶ沢甚句』『弥三郎節』『中里なにもささ』も言うに及ばず、嘉瀬奴踊り歌詞も、その時代々に即応して唄われてきたのではないだろうか。

唄そのものの源流は、どこから入ってきたものか定かでないが、その土地、その部落にマッチして完成されたであろう嘉瀬の奴踊り唄も、一種のかたりべ伝承唄として歌い継がれてきたことには真違ひなからう。

「日当りのよい草地にふつうなキンポウゲ科の多年草で有毒植物の一つ。根生葉がややウマの脚の形に似ているのでその名がある。全体に長い毛が生え、根生葉は手のひら状に分裂する。4〜6月に葉間から40cmぐらいの上方の分岐した花茎を立て、枝頂に径2cmに近い5弁の黄花を開く。おしべとめしべは数が多く、のちに多数の分果の集ってできた、こんべい椽に似た緑色の丸い果実を結ぶ。」

花の写し書きも添えて、以上は山中久美先生から特に寄せてもらった「タタラビ花」の解説です。そこで私も、花であるので俳句歳時記にもある筈と、角川書店編の合本俳句歳時記新版から探してみた。あった、春の植物の中で「金鳳華」、「毛茛」、「馬の脚形」、「駒の脚形」とも名前がついている。重複するようだが、歳時記からの文も書き移す。日当りのよい山野に多い。高さ50cmぐらいで茎を直立する多年草。晩春、枝ごとに花茎をぬき、直径2cmぐらいの黄色花を開く。有毒植物の一つだが、この草を服すれば、瘡が治癒するというので（瘡落し）とも云う。例句も参考のために記してみる。

◎金鳳華子らの遊びは野にはずむ 橋本多佳子

裏のかぐじの タタラビ花コ

昼間しおれて 夜に咲く

昭和現代飽食時代の今と違って、その日の糧にも満足で無く、朝のしらみと共に起き、夕べに星をいただく労働に明け暮れた封建時代の私達の祖先は、喜びを表現できるのは、盆踊りの夜であつたらう。若者が恋を語り合える夜、それは盆踊りの夜であつたらう。

若者の想いを唄に託して歌った歌詞、それが『タタラビ花コ』であらうし、当時の風俗詩、また艶歌であると私は解する。

また当時の嘉瀬人は一面酒脱、語駄句も併せ持った人も多く

稲妻ピカピカ雷ゴロゴロ

意気地なし親父

ばら株さぶささて千両箱ひろた

と、夢を食う一面の、苦しい生活のなかから、明るい面も浮き彫りした人間性を発揮していたことを、私は奴踊りの歌詞のなから教えられる。出来秋の稔りに満ち足りて、稲穂たれる道を、野づらを、奴踊り唄を放歌したこともあつたらう嘉瀬人の、喜びの唄を、当時に返って私は聞いてみたい。

## タタラビ花コ

秋 元 惣之進

昭和六年、八年、九年と津軽一帯は大凶作が続いた。とくに嘉瀬村は岩木川の逆流で旧十川と飯詰川が決壊し、皆無作が続き、村人は貧窮の

どん底に落ち明日の糧にもこと欠き、喰うや喰わずの農家が続出した。当村からも、おびただしい数の拾五才から二〇才位の身売娘が金額に応じ、三年〇五年の期間で遊廓へと売られ楼主の束縛下におかれた。

山中 正津

当時、村から身売りした娘某(名を隠し)が、望郷のあまり両親に差出した手紙には「私は何故、こんな所に来たのでしょうか。一日も早く両親の顔を見たいが借金を返す迄は身動きも出来ず、ひたすら私の人生は、

裏のかくじの タタラビ花コ

昼間しおれて 夜に咲く

と、せつせつと綴った文面に両親は慟哭の涙で漏れた。

タタラビ花コは華麗で涙を秘めた美人に似て、昼間しおれて夜に咲き他の物に絡まる赤い可憐な花であるが、遊女も、昼間しおれて夜に咲きお客に絡まり赤く咲く可憐な、タタラビ花コのように夜には遊女の女体が狂い咲き乱れ客にもてあそばされる身体であり全たく悲惨である。

貧困からくる人間同志の人身売買の矛盾、この悲惨な現実を村人は奴踊りの歌詞として無言の訴えを唄にしたのが、タタラビの花コとなった。貧しきとの闘い、貧しさからの開放の盆唄であるが親の借金が娘を苦界に落とし、娘を売った親の心、売られた娘の心、両親は咽び、売られた娘は昼と無く夜と無く心の中で咽び泣き何故、この世に生れて来たのか、これが生き地獄でなくて何んであろう。遊女の境遇は全たく六道生死の苦界である。

一見、華やかに見える花柳界の巷には色々複雑な人間模様が描かれ人々の生活にも、さまざまの影響を与え人生の縮図をなし近隣の風記を乱したが、昭和三二年売春禁止法施行に依り廃止され赤線の灯が消えた。

## タタラビ花コは恋の唄

嘉瀬の奴踊りの歌詞で「嘉瀬と金木の間の川コ 石コ流れて、木の葉コ沈む」はあまりにも有名であるが、言い伝えによれば、元禄十二年(一六九九年)金木新田開発の際、嘉瀬三百町歩の開拓工事奉行となつた鳴海伝右エ門は、真面目で開拓に全力を尽しながらも、農民たちには寛大で、他の工事奉行たちの農民を酷使したり上役にへつらつたりして出世を急ぐ者をにがにがしく思っていた。そういうゴマスリ同僚が、やがて上役となり、伝右エ門や農民たちにいばりちらしたのを、主人思いの奴徳助が、伝右エ門をなぐさめるため踊り、唄ったのが、嘉瀬の奴踊りだと云われています。

嘉瀬の「桃」が唄った

いまの世の中 世はさかさまで

嘉瀬と金木の間の川コ

石コ流れて 木の葉コ沈む

はレジスタンス(権力者への抵抗)の歌であつたらうが、その他の歌詞をみれば、案外と夢があつたり、ユーモアがあつたり、喜びを表現したり、情緒いっぱい歌詞であつたりする。その中で。

おれのかくじの タタラビ花コ

昼間しおれて 夜に咲く

は、恋の唄だと思ふ。

タタラビ花コと云うのはどんな花なのか、植物図鑑、四季の山野草、葉草カラー図鑑等を調べたが見つからない。

ある時、秋元惣之進会員が「タタラビ花コを調べるため、五所川原の花屋や金木の花屋へ聞きに行き、花屋さんでもいろいろ花の本を調べてくれたがわからない。村の古老にも尋ね歩いたが、黄色い花だという人もあるし、薄桃色の花だという人もあるがハッキリしない。私の原稿は凶作時代に女郎屋に売られた村の娘の嘆きを書いたが、原稿を出した後で、黄色い花の咲く毒ゼリみたいな、田の畦などに生えてる草だと聞いた。」と話したので、私は「それでは、キンポウゲ科のキツネのボタンとかウマのアシガタとかいふのかな?」と云うと、「なんでも昔、ケグサ(飼草)刈るにゆけば、草の中さ入ってるので毒草だということ捨てたもんだそうだ。」しかし、キツネのボタンでもウマノアシガタでも花は夜に咲かねえよ。昼にちゃんと咲いてるんでないか」といふと秋元惣之進は、「タタラビ花コのことハッキリ分らねはで、昼間しおれて夜に咲く。という場面を書いてみたんだ。」と云う。

×

×

×

昔、娯楽のない頃はお盆と正月が何よりの楽しみであった。特にお盆は先祖の墓参りを終った後、夜遅くまで老若男女が盆踊りに興じた。男女交際も天下公認の社交場でもあった。盆踊りの踊り方や唄にも順序があった。最初「ただ踊り」から始まって「甚句踊り」「逸子踊り」と進み、最後に「奴踊り」で締めくくった。唄も「どだればち(津軽甚句)」「鱈ヶ沢甚句」「逸子唄」「奴踊りの唄」となるわけだが、奴踊りの頃には夜も深く更けて午前様となるので踊り手もベテランだけになるのだった。

さて、タタラビ花コは恋の唄という事だが、学名どうりのキンポウゲ科ウマノアシガタだとすれば、「昼間しおれて、夜に咲く」は逆説で、嘉瀬と金木の間の川コのようにレジスタンスの意も含むのか、しかしこの場合は、石コ流れてのような相手にぶっつける何かしらが無い。

奴徳助が即興的に「石コ流れて、木の葉コ沈む」と唄ったように、その時代時代の唄い手が、即興的に唄った歌詞が今に残るその一つではないかと思ふ。

親の意見とノ茄子の花はノ千に一つのノまた無駄もない

このような教育的な歌詞もあるし、

お山かけだきやノ初孫授じだノ手足大きくてノコリヤ相撲とりだ。

この歌詞も、丈夫な孫の誕生を喜ぶと共に子孫繁栄をお岩木山へ祈願している様子が伺われる。

「おれのかぐじ(家の裏の土地)に、タタラビ花コ(ウマノアシガタ)がある。タタラビ花コは、毒草だが使い用によつては薬にもなる。昼間しおれてという事は、非常に労働が厳しく、昼は疲労困ぱいの極にあつても、夜はこのように元気一ぱいで踊れる。」また、かぐじというのは家の裏手の塀垣に囲まれた土地を指すので「表面に見えないところに隠し持っている武器(ムシコ)は、昼間はしおれておつても夜になれば、花開かせることができますよ」と相手の娘に訴えているのだ。「この踊りが終ったら、夜這えに行く元気はまだあるのだぞ」といふ、公然と唄いながらのサインを送っているのである。

無学の者は駄弁をふるというが、どうも長々とお祖末でした。

# タタラビ花コは抵抗の歌

秋 元 幸之進

一番「嘉瀬と金木の間の川コ、石コ流れて木の葉コ沈む」  
 二番「おらいの裏庭のタタラビ花コ、昼間しおれて夜に咲く」  
 三番「稲妻ピカピカ雷ゴロゴロづくなしおやし  
 バラ株さぶつちやさて千両箱拾った」  
 四番「嘉瀬はよいとお米の出どこ、秋は黄金の波が立つ」  
 五番「嘉瀬の観音様の井戸水のめば、七十年寄りも若くなる」  
 これは嘉瀬の奴踊りの歌詞であるが、今回二番のタタラビ花コについての意見であるが、この歌詞の意味は、タタラビ花コが昼間しおれて夜に咲くという単純なものではない。

## 阿部按摩師笑談

### 嘉瀬話 「厄払い」



山の麓の一軒家が三次郎の家であった。  
 一人娘のサドは十九で厄年であった。色白で気立がよく、評判の美人娘であるが、村里離れた生活のため、世の中のことには余り知らなかった。  
 ねらいをつけていたズルスケの金九郎は、両親が山に働らきに出て行ったのを見届けてから、三次郎の家を尋ねた。  
 金九郎「厄払いに、きたじや」  
 サド「厄払いって、どんなことするんだべ」

タタラビの花は俗名馬の足型ともいう。キンポウゲ科に属し、原野に発生、背丈は一〇センチか二〇センチの小さな多年草で、春に黄色花が咲く。蔓のようにはって多くなるが、葉は円型でセリの葉よりやや大きく、昔は畦畔などによく生えていた。  
 しかし、この花は夜に咲く花ではなく昼間に咲いている。即ち、奴踊りの発生の根拠を考えると、一番の「石コ流れて木の葉コ沈む」という物の道理が通らないことを訴えた農民の抵抗の歌であるように、この二番の歌詞も、貧しくしいたげられてきた農民の抵抗の心が入っていると思う。世の中逆さまでである。  
 津軽新田開発は、農民の犠牲によって行なわれた。土に生れ、土に培われた農民生活の喜怒哀楽をぶつけた盆踊り、「嘉瀬の奴踊り」の歌詞にこそ農民の真髄を見る思いがする。

金九郎「女子は、十九になれば厄年なので、十九の女子さ廻ってらんだ。ナーニ、我のいうとおりにはすれば、イインダネ」  
 サド「へバ、やってもらう」  
 金九郎「寝床サ、フトン敷いで、裸になって寝なが」  
 サドは、金九郎のいうとおりにした。  
 金九郎「始めは、厄ば払うハデ、ワンツカ痛バテ、スグイゲナルハデガマンへ」  
 厄払いが終ると、サドは満足気に桜色に顔を染めた。  
 夕方、両親が帰宅すると、娘はすぐ知らせた。  
 サド「今日、厄払いしてもらった。さっぱどした。厄払いだば、なんぼやってもいい」  
 (村)

あ ち け 月 女 日 ち 日 ち 日 ち 日  
 さ 口 ふ 田 ら 田 も 〇 ち 日  
 ち 日 こ 日 む 〇 わ 〇 は 〇  
 ひ 〇 え 〇 う 〇 か 〇 に 〇  
 も 〇 て 〇 む 〇 〇 よ 〇 〇 〇  
 せ 〇 あ 〇 の 〇 た 〇 〇 〇 〇  
 い 〇 さ 〇 お 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 ん 〇 き 〇 く 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 ち 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 (一語音印釈)

## 《 特集 2 》

### 津軽の言葉 嘉瀬言葉

言葉は、何時の頃から使われたのかは知らない。  
 先日、テレビで弥生人の水田の足跡が放映されていたが、約二千年前(弥生時代中期)には高度な農耕文化の中で、稲作が営まれていた。五六枚の水田跡に一五八六の足跡。  
 その頃の人と人との意思伝達の方法には何が使われたのか。今まで、地下に埋れていた遺跡が掘り起され、古代の謎が一つ一つ解明されつつある。

— 編集部 —

文字は、津保化族の石置の文字があり、書文字では、口音に基く四十八音の土砂、灰などに書く法があったという。とすれば、言葉はこの頃に既に使用されていたと考えられる。東日流外三郡誌(上巻七十三頁)に、津保化族の「当時の言今に遺れるは左の如し」と記されていて、  
 チャッパ(食物)、ビッキ(童)、スコタマ(働き)、シバケ(寒さ)ドス(病)、クワテイ(でも)、ダミ(死)、テキギ(発明者)、アネコ(美女)、アヤ(父)、アバ(母)、アバ(親母)、ヂッコ(親父)、テケ(不具者)、ヤントラ(墓地)、ガンド(盗人)、ノノコ

ぶ 田 ち 日 ち 日 ち 日 ち 日  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇  
 (語濁音印釈)

昔から俗に、「嘉瀬の人は言葉が悪い」と他町村の人から言われるが、嘉瀬言葉の語源を並べ、私なりに嘉瀬言葉のルーツを探ってみたいと思う。

- ① (ヤバツ 野蛮人)  
あの人は、知能が低く教養も無く、乱暴で無作法な人で、後が怖いから野蛮人 〓 ヤバツンの「ン」を捨て「ヤバツ」と略した。
- ② (メグサイ 女交さい)  
昔は男尊女卑、男女七才にして同席云々、女と交わることは恥とされ交(グ)とも解し「女交さい 〓 メグサイ」
- ③ (モツケ 餅気)  
おせっかいな人が頼まれもしないのに、心や口が軽く自慢する。餅は粘り気があって何にでも、くっつくので餅気である。
- ④ (オタル 老倒る)  
年老いてる人は、何事に付け疲れて倒れやすい。老人の様に倒れる 〓 老倒(おたる)の意。
- ⑤ (エフリ 栄振り)  
あの人、綺麗な着物着て、髪にポマード付け、化粧して、いつでも見栄を振り、「見」を捨てて栄振り(エフリ)だ。
- ⑥ (カラキジ 絡生地)  
とも解し「ひま」が無いの意。

- ⑬ (アデクサイ 相手臭い)  
何事も対立者に勝つ自信があると「アデクサイ」と言うが、相手を絶対に負かすと言う満々たる自信と、相手の心を探ったが、相手臭い 〓 アデクサイと言う。
- ⑭ (バシラケ 罵精ぐ)  
大昔は、灯油もロソクも無く、夜になると家も外も真暗で、子供達が騒ぐと精霊(死者の靈魂)が怒り、罵られるからと、罵と精を取って罵は(ののしる)精は(しら)と解し 〓 罵精ぐな。
- ⑮ (アベケナイ 味気ない)  
何を喰べても、美味しく無い喰物を「アベケナイ」と言うが、味の「ア」を取り、又、嘉瀬独特の「ベ」の中に入れ味へ気無い。

- ⑯ (スズカル 鈴 鳴るな)  
赤子をあやかすと、笑うと良いのだが、泣く赤子もある。泣くと、鈴が鳴る様に煩さいから、鈴が鳴るのを訛って鈴かるな。
- ⑰ (ケナイ 食無い)  
隣村で、俺の息子に嫁、呉れると言うておるが、背が低く、瘦せて「ケナイ」くてなあ——。あんまり食無(ケナイ)いも仕事の能率も上がらないし、喰べていけない。食は「ケ」とも解す。
- ⑱ (シバレル 凍晴れる)  
真冬の星空で、明日の朝は、「シバレ」で氷張る様だ、乾餅下げるに凍晴れて良い夜だ。凍るは「シ」とも解す。

- ⑲ (ヤバツ 矢撥)  
太鼓を叩くのに、弓の矢を撥(バツ)にして叩いたので、太鼓が破れ

あの嫁、カラキジで、出されだど(離婚)。同じ土地に生れ、あの人と何を話しても、何時も絡んだ話し言うが、カラキジだんだ。絡むと、生れと、地を取り「絡生地 〓 カラキジ」

- ⑦ (イタワシ 悼童子)  
可愛い童子(ワラシ 幼児)が亡くなり、死を悼んだ。童子を悼んだので、ワラシの「ワ」を捨て、逆に読んで、悼童(イタワシ)となった。大切な物を失って惜しい事。
- ⑧ (フジャーラム 踏戯む)  
草木が、あまりにも延びるので、子供達は踏んで戯むれたのが、踏戯む(フジャーラム)の始り、又、あの人は甘い顔見せると付け上がるので踏戯むか、どうかすれば良い。
- ⑨ (ヒキ 美姫)  
お城で、美しく可愛いお姫様が生れたが、あまり泣くので、家臣は美しい姫を「美姫 〓 ヒキ」泣いてると、あやしたのが始り、姫は、「キ」とも解す。
- ⑩ (ホンジケナイ 帆付無い)  
風があるのに、舟に帆を付けないで櫓を漕ぐから帆付無い、間抜けと言う意。
- ⑪ (ジャバ 若母)  
子供を生み、母となっても娘っ気が抜けず、娘時代と同じ様に子供達と一緒にあって、飛んだり踏ねたりしている若い母を、若母 〓 ジャバと言うたのが始り。
- ⑫ (マエネ 間工無エ)  
人に物を頼まれても、駄目だと言うのを「マエネ」と言うが、間は暇

鳴らなくなったが「矢撥 〓 ヤバツ」となった。汚ないの意。

- ⑳ (アサゲ 足歩く)  
歩くのを、「アサゲ」と言うが、アサゲは足で歩くの意。
- ㉑ (ウルガシ 熟化し)  
水に米を「ウルガシ」なさいと言うが、熟化した米や、其の他の物は水分を含み、ふくらみを持って熟れるので「熟化す」又「潤化す」。
- ㉒ (アメダ 逆を取って飴だ)  
喰物が腐敗化の寸前や、物事が途中で駄目になると、「アメダ」と言うが、美味しい喰物が食べられなくなったのを、逆に 〓 飴は一番美味いから逆を取り飴だ 〓 アメダと言った。
- ㉓ (ヤッパマル 矢刃丸)  
大男達が喧嘩して、仲裁に入ったが止らず、弓矢と刃物を持って来て喧嘩止めなければ、矢を射つか、刃物で痛め付ける、と言ったら、大男達は喧嘩が止んだので、矢と刃には丸くなると言うたのが、矢刃丸(ヤッパマル)となった。
- ㉔ (ウダデ 憂立)  
又、酒呑んでうるさい話して、「ウダデ」な 〓 憂は 〓 心配や悲しみ

の意、気に食わない、思う様にならず心配な事。

- ㉕ (トツパレ 閉つつ張れ)  
昔は、娯楽に恵まれないので、子供達に昔話を聞かせたが、昔話が終ると、「トツパレ」と言った。今度は終りだから幕を閉めて張れ、閉は「ト」とも解し、閉つつ張れの意。
- ㉖ (ヒンツ 便壺 〓 便所)  
今は遠い昔のことだから、大抵の人は忘れておると思うが、便所を、